

鰐皮の財布



想うはあなた一人

高木徳一

彼方の太平洋を見詰め、先進国に負けるな、大志を抱いて突き進め、と自分に無言の内に語っていると思う学ラン姿の豊栄が西郷隆盛像を見上げている。

上野公園の新緑の香りが明るい陽光の下、辺り一面に漂う。行き交う人々の足取りも軽く、表情も華やいでいる。

「僕は一人かな」背広姿の眼鏡男が柔らかな音調を発する。声の方に振り向きながら豊栄は、「ええ」と頷きながら返した。

「良い身体をしているね」「時々、漁師を手伝っていましたから」「そうかね。ところで、遊びに来たのかな」「いえ、佐渡島から出て来て東京で仕事を見付けたいと思っているんです」

ハキハキと答える。

「多分、そうだと思つて声を掛けたんだよ。歳は幾つ」「十七歳です」

二つ鯖を読んだ。十五歳では子供にみられ、雇っ

て貰うには不利になると咄嗟に考えたのだ。戸籍や住民票の提出を言われれば判つてしまうのだが、そこまでの知識はその時点で持ち合わせていない。「小父さんはこういう者です」と言いながら、毛深い手で名詞を差し出す。受け取った豊栄のつぶらな瞳には、就職斡旋業、佐伯事務所 所長 佐伯龍之介と住所、電話番号が映った。

「就職のお世話をする仕事をしているんです。上野駅前の紳士靴の製造販売業の会社で、親が病氣になった店員が二人辞めてしまったので、人手不足で急遽募集すると言うので、お手伝いしているのです。月給は二万円で独身用宿舍もあります。どうですか」「良かったです。働けるならどんな仕事でも一生懸命やります」「そうかね、そりゃ良かった。人事部長さんを車に待たせているので、これから呼びに行つてあそこのお店で面談して貰うよ。そこで、細かい質問をして下さい。あなたなら絶対大丈夫です」「よろしくお願い致します」

唇を真一文字に閉めた豊栄は坊主頭を下げた。

「言いくいんだけど、紹介料の三千円を前払いでお願ひします。君を紹介した後、直ぐに次の人材を探さなくてはならないので」「判りました。でも手持ちは二千円しかないんですが」「それで良いですよ。おまけ致します。その会社は給料の前払い制度がありますから安心して下さい。私が保証人になつてもよろしいですよ」

ポケットから金を取り出し差し出すと、眼鏡紳士はその場で金額を記入し、印紙付きの領収書を豊栄に渡した。

「早速呼んできますからあの店の玄関前で待機していて下さい」と言い残し、小走りに横幅の広い石段を降りて行つた。

雇つてくれれば良いなあと豊栄は思いながら、目の前の平屋のレストランに脚を運んだ。親子連れの客の出入りが多い。

腹時計では三十分が過ぎ、一時間経つたと思わ

れ、豊栄は不安になつた。騙されたのか、否、礼儀正しく紳士的だったので、もう少し待つてみようと考えた。期待は空しく西日が陰つてきた。

騙されたと気付かずにはいらなかったが、交番には届けられない。故郷に追い返されるのが関の山だ。虎の子として所持金は三千円あつたのだが、相手の要求通り払えば残金は零となる。そこで、度胸を決めて二千円と嘘を付いたのだ。しかし、この戦いは見事に負けてしまつた。

豊栄は厚唇を深く噛み、困惑の表情をみせる。

職業安定所が在ることは職業家庭科の授業で習つていたが、家出同然の自分は無理な相談だ。また、『職求む』とのプラカードを下げれば直ぐに捕導されてしまう。では、どうすれば良いんだ。東京に親戚や友人もいないし。こちらから道行く人に声を掛けるのか、学ラン姿は相手にされない。都合の良い話には騙しがあると、痛いほど分かつた豊栄は悲嘆に暮れる。

当座はこの残金でしのがなければならぬ。三食はパンと牛乳で寝床は公園内の大木の下。寝心地からいえば、地下街が良いのだろうが警官の巡回や誰かの通報で交番に連行される羽目になる。

普段着の方が少しは目こぼれになるだろうが、寝る時以外は窮屈になったこの学ランを着てきた生活だったのだ。なけなしのお金で普段着を買えば、食料で苦しむので、出来ない。

一週間が無為に過ぎて、いよいよお金も底を付いてきた。飲み水は公衆便所で何とかなるのだが、食べ物にあり付けない。

黄昏時に、豊栄は左手の小高い丘にあるややくすんだ白い仏塔。バゴダと隣の釈迦の顔が見下ろす桜並木通りをふらつきながら歩いている。

「坊や、お腹でも痛いのかい」

白黒半々の髪をぼさぼさに伸ばした男性が背を曲げ、話し掛ける。

「いえ、昨日から何も食べていないので腹へこな

んです」と言うのがやっとだった。

「それは気の毒にな。何もないけど、家に来るか」後に付いて行った先は、林の中で青いシートが木に繋がれ、屋根代わりで、周囲にはダンボールが積まれ、地面に青いシート、ダンボール、新聞紙が重なって床をなしている。床に腰を下ろし、パンの耳と缶に入ったお茶を出され、無我夢中で食べる。やっと生きた心地がした。

東京に職探しに来て詐欺にあつた事を話すと、「お金だけで良かったわな。人狩り族といって騙して小部屋に入れ、監視付きできつい労働をさせ、賃金をピンはねする連中がいるとの噂がある。それに遭わなかっただけでも良しとしなくちゃあ」と言われ、豊栄は身震いした。

「仕事探しといつてもしつかりした紹介状とか保証人がいないと良い仕事は見付からないな。体一貫の建設現場には直ぐ入れるが。わしは青森の農家の三男坊で中卒後、建設現場を転々として、最

後は東京タワーの現場だったが、足場から転落して左腕を骨折したわ。小さい会社で健康保険、労働災害補償保険や失業保険に加入していなかったので蓄えたお金は素っ飛んでしまい、失業の憂き目に遭ったんじゃない。しつかりした会社を選ばなくては駄目だわ。世間は東京タワーの完成、アジア大会開催に湧き、朝鮮戦争に続き今年からベトナム戦争が起こつて、軍需産業が盛んになっている。それに乗りそこなつたわしはゴミ箱をあさつては食料を見付けてる。最近では、放置された空き缶や空き瓶、金属の食器類やラジオ、自転車などを集めては中古業者に売つてるぜ。前にある自転車もリヤカーも拾い物だよ。このラジオ、時計もそうだ。台所用品も皆そうだ」

豊菜は幾分精気が戻つた目で見回す。

「お手伝いを一生懸命しますから、暫らくここに置いて下さい」

新聞紙に額を付け、深々とお辞儀する。

「仕事が見付かるまでいろや」

感謝の言葉を述べた豊菜の心に明かりが差した。自炊などしたことのない豊菜は見よう見真似で、夕食の支度をするのだった。ブロックで組んだ急ごしらえの竈に薪をくべる。ご飯とこつた汁をこしらえ、喉を通し、美味を今更ながら感じた。曇り空は林を闇に溶かし込んでゆく。

翌朝は目覚ましの音に起こされ、ダンボール小屋から首を出すと、木漏れ日が眩しく眼に入つた。通りの反対側にある公衆トイレで顔を洗い、食事は早々に済ませる。学生服姿だと目立つし、汚れるからと灰色のズボンとシャツに着替えさせられた。

「さあ、朝の仕事だ、出掛けるぞ」

二人は表に出る。

「信さん、いいかな、出発するぞ」「おー、いいとも、徳さん」

小顔の中で目だけが異様に目立つ細身姿が隣のテ

ント小屋から外に顔を見せ、大きく伸びをした。

「ここに居るのは、豊（ほう）ちゃんて事情があつてちゃんとした仕事にあり付けるまで泊まることになった」「佐渡豊栄と言います。宜しくお願いします」「何も本名を名乗ることはないぜ。ここに住人は細かいことは詮索しないんだ。おれは信さんと呼ばれてる。五年前にここに居つてからは徳さんに世話になつてゐるんだ」「そんなことはねえよ。お互い様だな」

リヤカーの引き手は信さんで、徳さんが押す。

花園稲荷神社の幟がはためくのを右手に見ながら緩い坂を下る。動物園通りに出て、弁天島交差点の右奥に不忍池の弁財天の六角堂が赤を誇張している。南に進み、京成上野駅の地下からの出口を越え、映画館と食堂が並ぶ中央通りの地区にやつて来た。人の姿はまばらである。路地に入り、ゴミ箱を漁った。異臭が豊栄の鼻をひん曲げ、顔を背けさせる。

「なーに、直ぐに慣れるさ、一週間もすれば」

信さんのテノール並みの声が直ぐ横で上がった。徳さんは左の肘と肩の回りが悪そうで、左手は添える程度で主に右手で缶と瓶を、大きなポリ容器に仕分けする。雑誌や新聞紙は紐で縛る。豊栄は見習う。

「このシユウマイは良さそうだから、お前も食べてみる」と言われたが、豊栄は怖じ気付いた。

「以前、雑誌の間から一万円札が出て来た事もあつたな」「そういえば、信さん。わしは宝くじの束を見付け、どうせ外れ券だと思つたが念のため調べたら最下位賞が二十数枚あつて助かつたわ。豊ちゃん、何かを探し出すというのは嬉しいものだぞ」「そうなんですか」

更に不忍通りを渡り、鈴木演芸場から湯島通りにある上野広小路の方まで脚を伸ばす。

「そろそろサラリーマンが出勤の頃だわ。我々はここいらで雲隠れしよう。今日の戦利品はまあ

まあだな」

中肉中背の徳さんは声まで中音である。

信号待ちの人は点から列になりつつあり、駅の近くで速足の靴音が響いてくる。

往きに下った坂を上る。豊栄も徳さんの横で荷が騒々しいリヤカーを押すが、どうしてかなりの力を要する。普段は左腕が不自由な徳さん一人なので大変な労働だと豊栄は思い遣った。

小屋に着くや汗を拭いにトイレに一人ずつ駆け込む。残りは荷の見張りをするためであった。

トイレから反対側に目を向けた瞬間、林の中で青空に浮くような感じの軍人のブロンズ騎馬像に豊栄は目を見張った。丁度小屋の北側で動物園の正面入り口に近い。近寄った巨大台座には小松宮親王とある。偉い人と思い、傍らで眠ることは恐れ多いと思うが、今はこじかない。仕方がないので、お許し下さいと小さな胸に呟いた。

小一時間ばかりして荷台がベニヤで囲まれた中

型トラックが通りに止まり、戦利品が中古業者に手渡された。

「さあ、今度は電車に乗るぞ。良い物に着替えるんだ」

豊栄は紺のズボンと白ワイシャツに着替えさせられ、大人物で少しだぶついてはいるが。徳さんも同じスタイルになった。頭陀袋を一つ持たされた。何に使うかは後の楽しみだと言われる。信さんは黒ズボンに白地に茶色の格子模様のシャツに、薄いジャケットを着て、サングラスで眼を覆っている。

山手線の上野駅に入り、構内のあちこちのゴミ箱から雑誌類を探し、頭陀袋に詰め込む。

「よくゴミをはたいて丁寧に扱うんだぞ。高く売るためだ」

大勢の前でゴミを漁るのは恥ずかしいが、食うためには仕方がないのだ、ましてここは見ず知らずの土地で、知り合いはいないのだからと、豊栄は

続きは
完成版で
お楽しみ下さい。